第3743図

かやつりぐさ科

おおかわずすげ

Carex stipata *Mühlenb.*

中部以北の湿地や溝辺に生ずる多年生草本。北米にも分布する。高さ50cm内外、全草軟味あり、鮮緑色で、稍々緩るく叢生する。茎は太く直線的、稜はひどくざらつき、また面は内方へくぼんでいるから鋭い3角柱に見える。中部以下に葉がつくが、その巾5mm内外、断面M字状である。小穂（図上）は果嚢が強く突出するためいが状をなし、稍々穂様の円錐状に茎頂につく。各小穂とも雌雄性で、頂部若干花が雄性。穎は卵形で緑背1脈、後に暗褐色となる。果嚢は穎より長く、5mm長、はじめ直立、成熟して開出し、淡黒褐色となり、下膨れの長卵形で多脈、基部は海綿質である。和名は大形のカワズスゲの意。

第3744図

かやつりぐさ科

からふとすげ

一名のるげすげ

Carex Mackenziei *V. Krecz.*

(=C. norvegica *Willd.* non *Retzius*)

北半球の北地一帯の海岸湿地に生える多年生草本。我国では北海道根室に稀産する。根茎は短かく斜めに走り、茎は5–6本叢生し、高30cm、内外稍肉質の三稜形で直立し、基部1/3は葉鞘で包まれる。葉は灰緑色で軟かく、平滑であるが、強ルーペ下には乳頭突起がみえる。小穂は3–5、頂に稍密集し、赤銹色で長さ1–2cmの楕円体、頂小穂は基部に向って細まった雄性部を有する。穎（下図）は膜質、果嚢（上図）はそれと同高、但し灰緑色で対照が著るしい。長さ3mm許。本種はもとC. norvegica *Willd.*（1801年）の学名を使用したが、より古い同一名の存在（Retzius 1779年）のために改名された。ノルゲスゲの名は旧学名に基ずいている。

第3745図

かやつりぐさ科

ひろはおぜぬますげ

Carex traiziscana *Fr. Schm.*

樺太から北海道をへて上州尾瀬にいたる間の水蘚湿原に生ずる多年生草本。地下茎は稍々緩く地上茎を生じ、高さ50cm内外、葉は白味の強い灰緑色で軟かく巾3–4mm多くは断面M状。茎は瘠せ上部ざらつき、頂部数cm間に多少之曲し、また上方につまって少穂数個をつけ、小穂は長さ1cm未満、10雌花内外より成り基脚に若干の雄花、最上のものでは基脚細長い。穎は淡い赤褐色で、淡色縁、果嚢はそれより長く、3mm長、2稜の鋭どい楕円体で、両面に縦脈が隆起し、先端は極めて短かい嘴をなし、黄緑色、熟して稍々銹色に近ずく。和名は尾瀬原湿原に産するによる。

第3746図

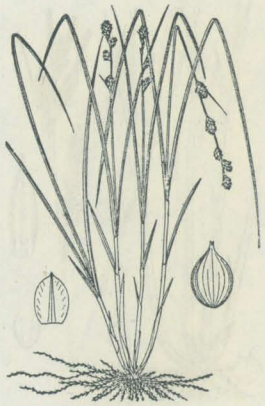
かやつりぐさ科

はくさんすげ

Carex canescens *L.*

北半球北地の高山、水湿の草原に生じ、南米、ニュージランドにも分布す。我国では中部以北の高山に見る。株立となり、全体瘠せ、葉、茎、花、果すべて密に乳頭突起を被るために白っぽい緑色を呈する。葉は巾3mm内外、断面V状。茎は高さ30–50cm、3稜で上部は多少ざらつき、頂部に断続して数個の小穂をつける。小穂は基脚の雄花部が細い脚部をなして目立つ。穎は淡黄色で広卵形、果嚢はそれより長く、2mm長で丸々と太った卵状楕円体、灰緑色で、短かいが明瞭な嘴が急に突出している。和名は最初の発見地加賀白山に因む。

第3747図



かやつりぐさ科

ひめかわずすげ

Carex brunnescens *Poir.*

北半球の高山の湿気のある草地にはえる多年生草本。我国では中部以北の高山に生ずる。全体としてハクサンスゲに酷似し、殊に標本では区別がむずかしくなる。しかし、生時には鮮緑色であり、一般には丈低く30cm内外、葉の巾2mm以下、小穂全体に緑色味が強いのは、穎は緑背であり、果嚢もまた淡緑色を呈するためであり、且又果嚢は急に尖らず、稍々長味に尖った嘴をなすので区別できる。和名はカワズスゲに似て穂が小形であるのに依る。

第3748図

かやつりぐさ科

しろはりすげ

一名いっぽんすげ

Carex tenuiflora *Wahlenb.*

北半球の水蘚湿原に生ずる多年生草本で、我国では北海道及び中部本州（日光戦場ヶ原、信州等）に稀産する。根茎は多少匍い茎は散立し、高さ40cm内外。葉は茎より低く太線形で巾1mmに達せず。茎は一見、頂端に白色1小穂をつけるようだが、実は3–4小穂の密集したもの。雌花穎は膜質稍光沢があり、緩く果嚢を抱く様はコメガヤの風貌がある。果嚢は穎と同長、又は多少超出し、長さ3.5mm内外、白味勝の楕円体で縁は明瞭な稜をなし、細い縦脈数条、先端は極めて短かい突起がある程度で円頭をなす。和名は白花をつける細いスゲの意。又孤立して茎を立てることによる。